HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	西フリジア語の文法構造 : 動詞 (5)
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 101, 93-129
Issue Date	2000-09-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33975
Type	departmental bulletin paper
File Information	101_PL93-129.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 101 (2000)

西フリジア語の文法構造 ── 動詞 (5) ──

清 水 誠

Struktuer fan it Westerlauwersk Frysk

── tiidwurd (5) ──

(*The Annual Report on Cultural Science* 49-1 (No. 101). The Faculty of Letters. Hokkaido University. Sapporo. Japan 2000. ISSN 0437-6668)

SHIMIZU Makoto (mshimizu@lit. let. hokudai. ac. jp)

§83 名詞抱合 (de haadwurdynkorporaasje/nomenynkorporaasje) : 概観

(1) はじめに

名詞が動詞の一部として取り込まれ，単一の合成動詞(または「複合動詞」)を形成する現象を名詞抱合 (または「名詞編入」) という (N＋V→$[NV]_V$)。オランダ語やドイツ語では，名詞部分が動詞から分離している分離動詞があり，これは西フリジア語でも同様である。しかし，オランダ語やドイツ語，それに英語では，名詞部分が動詞から分離していない非分離の合成動詞はきわめて限られている。一方，西フリジア語ではこのような非分離の合成動詞が数多く見られる。これはゲルマン語として特異であり，同言語特有の特徴になっている。さらに，これは一般にフリジア語群に共通し，西フリジア語の東側に隣接するオランダ語フローニンゲン方言 (オ. Gronings) にも見られる。以下では，名詞抱合という用語を非分離の合成動詞形成に限定して用い，その特徴を解説する。

次の 2 つの用例を比較されたい。

i）Heit lêst de krante.「父は新聞を読んでいる」

ii）Heit *krantelêst*.「同上」(ULI'S, A 19：13)

ii）が名詞抱合の例である。krantelêze［krɔ́ntəlɛ:zə］「新聞を読む」(krantlêze も可) は，名詞 (=「被抱合名詞」) krante「新聞」が動詞 lêze「読む」に抱合された動詞 (=「抱合動詞」) である。それにたいして，i) は分析型の「名詞句＋動詞」による表現 (=「動詞句表現」) である。なお，この例には特別に krantsje/kranterje「新聞を読む」という品詞転換による派生動詞がある。

抱合動詞に対応する動詞句表現には，「前置詞句＋動詞」というタイプもある。

iii）Mem spilet op 'e piano.「母はピアノをひく」(前置詞句＋動詞　op 'e pinao spylje)

iv）Mem *pianospilet*.「同上」(抱合動詞 pianospylje)

(2) 特徴：まとめ

西フリジア語の名詞抱合には次のような特徴がある。

① 生産性が高く，かなり自由に新しい語をつくることができる。抱合動詞の数は辞書に記載しきれないほど多い。

② 名詞抱合とならんで，「{名詞句/前置詞句}＋動詞」による表現，すなわち動詞句表現がほとんどの場合に併存する。

③ 抱合動詞は1語であり，しかも分離動詞と違って分離していない。

④ 被抱合名詞の語形は単数形とも複数形とも異なることがあり，合成語の成分としてはたらく場合の語形と共通することがある。

⑤ 抱合動詞はもとの動詞の語形変化を継承する。すなわち，名詞抱合を起こした強変化動詞は強変化のままであり，オランダ語やドイツ語などと違って，弱変化になることはない。

⑥ 被抱合名詞は総称的な意味を表わし，特定の個別的な指示物を示さず，単数・複数の区別も含意しない。

⑦ 抱合動詞は継続アスペクトを表わす「行為動詞」(エ．activity verb)

であり，完結・完了を含意する表現にはなりにくい。また，動詞句表現に比べて，個々の１回限りの動作よりも継続・反復や習慣・性質・能力などを示す典型的な動作表現に多用される。制度的・儀礼的・社会的行為や比喩のように，動詞句表現に比べて意味的な拡張を起こすこともある。

⑧ 被抱合名詞は動作主が表わす意図的な動作によって直接的な影響を被り，動詞の意味役割を充足するものに限られる。

⑨ 被抱合名詞は動詞句表現における直接目的語や道具・目標・場所などを示す前置詞句に対応する。主語は，非人称動詞としての天候動詞の一部や，非人称受動のように「内項」（エ．internal argument）としてはたらく場合を除いて，抱合されない。

⑩ 直接目的語を抱合した抱合動詞は，被抱合名詞と同族の直接目的語を伴うことはなく，この意味では自動詞である。ただし，動詞との結びつきの弱い「付加成分」（エ．adjunct）は，名詞抱合によって直接目的語に統語的に昇格することがある。逆に，直接目的語以外に動詞と結びつきの強い「補足成分」（エ．complement）を伴う他動詞句は，名詞抱合によって非文になる。このように，名詞抱合は動詞の「項構造」（エ．argument structure）を変化させる。

⑪ 名詞抱合には構文上の制約があり，語彙的な固定の度合いに応じて個々の動詞によって差がある。すべての抱合動詞が問題なく現われることができるのは，不定詞の名詞用法，te＋第２不定詞（「en- 不定詞」）の前置詞用法と文用法，進行中の出来事を表わす「oan it＋第２不定詞構文」である。語彙的に固定した抱合動詞は，その他の場合にも現われることができる。

⑫ 西フリジア語（あるいはフリジア語群一般）において名詞抱合による抱合動詞が広範囲で見られるのは，不定詞の種類として，動詞的性質の強い第１不定詞（「e- 不定詞」）のほかに，動詞的性質と名詞的性質をあわせもつ第２不定詞（「en- 不定詞」）があり，基本語順が OV 型であることと関係がある。すなわち，西フリジア語の名詞抱合は第２不

定詞からの「逆成」(エ. back-formation) に由来し，このために他のゲルマン語と違って，生産的であると考えられる。

§84 名詞抱合：個々の特徴

(1) 生産性など

(a) 生産性

名詞抱合は西フリジア語では生産性が高く，かなり自由に新しい語をつくることができる。辞書にはすべての抱合動詞を記載できないほどである。

i) bierdrinke「ビールを飲む」，kofjedrinke「コーヒーを飲む」，teedrinke「お茶を飲む」，wyndrinke「ワインを飲む」(以上 Zantema 1984)，molkedrinke「牛乳を飲む」(WFT 13/1996：370)，wetterdrinke「水を飲む」(ib. 16)

ii) ierappelbouwe「ジャガイモを栽培する」，ierappeldolle「ジャガイモを掘る」，ierappeldreagje「ジャガイモのゆで汁を捨てる」，ierappeljaskje/-skile「ジャガイモの皮をむく」，ierappelpjukke/-pripkje/-sykje「掘り出したジャガイモを集める」，ierappelsette「ジャガイモの苗を植える」，ierappelskrobje「ジャガイモを洗ってよごれを落とす」，ierappelsproeie「畑のジャガイモに水をまく」，ierappelsuverje「畑のジャガイモを他の雑草から選別する」，ierappelwaskje「皮をむいたジャガイモを洗う」(以上 Zantema 1984)，ierappelsutelje「ジャガイモの行商をする」(Dijk 1997：137)

iii) pianospylje「ピアノをひく」，fioel(e)spylje「ヴァイオリンをひく」，fluitspylje「フルートを演奏する」(以上 Zantema 1984)，gitaarspylje「ギターをひく」(Hoekstra 1998：61)，hoarnblaze「ホルンを吹く」，trompetblaze「トランペットを吹く」，tromslaan「太鼓をたたく」(以上 Zantema 1984)

iv) artikelkopyearje「論文をコピーする」(← artikel「論文」＋kopyearje「コピーする」) (Dijk 1997：14)

cd-keapje「CD を買う」(← cd「CD」＋keapje「買う」) (Hoekstra 1998：

57)

既存の動詞と競合する場合には，名詞抱合が起こりにくいことがある。たとえば，autoride「車の運転をする」，hynsteride「乗馬をする」，reedride「スケートをする」にたいして，?fytsride「自転車に乗る」はほとんど使わない。これは fytse「同左」がすでに定着しているためと考えられる（Dijk 1997：15)。

☞ オランダ語やドイツ語では名詞抱合は非生産的である。上記の用例に対応するものとして，オランダ語では pianospelen「ピアノをひく」，vioolspelen「ヴァイオリンをひく」，paardrijden「乗馬をする」にほぼ限られる。対応するドイツ語の抱合動詞はほとんど存在せず，合成名詞からの「逆成」による技術的な専門用語が多い。

(b) 被抱合名詞の数

名詞抱合は1回のみ可能であり，被抱合名詞の数はひとつに制限される。

De boer lade {de wein/hea}.「農夫は {車に（荷物を)/干し草を} 積んでいた」(Dijk 1997：153 変更)

→ De boer {*weinlade/healade*}.「同上」(ib. 153 変更)

→*De boer {*weinhealade/heaweinlade*}.「農夫は車に干し草を積んでいた」(ib. 155 変更)

(c) 分離動詞・非分離動詞の名詞抱合

分離動詞や非分離動詞も名詞抱合ができる。ただし，動詞によってはできないこともある。これは分離成分（いわゆる「分離前つづり」）の小辞（エ. particle)が他動詞化の役目をはたし，名詞抱合の自動詞化の性質と相容れないことや，動作の完結・完了を意味する「達成動詞」（エ. achievement verb）や「完成動詞」（エ. accomplishment verb）を形成することと関係がある。たんに方向を示したり，動詞の語彙的な意味を補足するにとどまる場合には，名詞抱合は可能である。

① 名詞抱合：不可

apelsutelje「リンゴの行商をする」(apel「リンゴ」+sutelje「行商をする（自動詞 mei ... の)」(Dijk 1997：137)

⇔*apelútsutelje「同上」(apel「リンゴ」+útsutelje「(...の) 行商をする (他動詞・分離動詞)」(ib. 137)

apelite「リンゴを食べる」(apel「リンゴ」+ite「食べる」)

⇔*apelopite「リンゴを全部食べる」(opite「食べ尽くす (分離動詞)」) (ib. 105)

glêsskilderje「ガラスに絵を描く」(glês「ガラス」+skilderje「絵を描く」) (ib. 122)

⇔*glêsbeskilderje「ガラスに絵を描きつくす」(glês「ガラス」+beskilderje「絵を描きつくす (非分離動詞)」) (ib. 122)

② 名詞抱合：可

teeynjitte「お茶をつぐ」(tee「お茶」+ynjitte「注ぎ入れる (分離動詞)」(Dijk 1997：121)

molkopnimme「牛乳のサンプルを採取する」(molke「牛乳」+opnimme「採取する (分離動詞)」(Zantema 1984：630)

bêdopmeitsje「寝床を整える」(bêd「ベッド」+opmeitsje「整える (分離動詞)」) (Hoekstra 1998：57)

tafelklearmeitsje「食事の用意を整える」(tafel「食卓」+klearmeitsje「用意する (分離動詞)」(ib. 57)

(2) 形態的特徴：抱合動詞の1語としての性質

抱合動詞は1語であり，次のような語の結束性 (ド. Kohäsion) を示す。被抱合名詞は単独の語として機能しない。

(a) アクセントとイントネーション

抱合動詞は被抱合名詞の部分に主アクセントがある。動詞句表現では動詞の部分に，より強いアクセントがある。

kofjesette [kɔ́fjəsɛtə]⇔*[kɔfjəsɛ́tə]「コーヒーをいれる」

右側の動詞部分に主アクセントを置くことはできない。イントネーションも右側の動詞部分だけでなく，抱合動詞全体にかかる (Dijk 1997：20)。

(b) 限定詞・修飾成分，代名詞化

被抱合名詞は名詞句を形成しない。どのような限定詞や修飾成分も伴うことがなく，代名詞で受けることもできない（Dijk 1997：13 ff.）。

① 不定冠詞，定冠詞

Ik wit dat er {{in/de} ko/{ Ø/de} kij} slachtet.「私は彼が {{ある/その} 牛 (単数)/ {{ある/その} 牛 (複数)} を屠殺していることを知っている」

Ik wit dat er {{*in/*de}/ { Ø/* de}} *koslachtet*.「私は彼が {{ある/その}/{ある/その} 牛を屠殺していることを知っている」

② 否定冠詞

被抱合名詞に否定冠詞 gjin はつかず，否定文は否定詞 net による。

Ik wol gjin bier drinke.「私はビールを飲みたくない」

Ik wol {*gjin/net} *bierdrinke*.「同上」

③ 所有代名詞，指示代名詞，形容詞，関係節

i）Hy hat al syn tosken poetst.「彼はもう（自分の）歯を磨いた」

Hy hat al {*syn/ Ø} *toskpoetst*.「同上」

ii）Sy moat noch dat skiep melke.「彼女はまだあの羊の乳をしぼらなければならない」

Sy moat noch {*dat/ Ø} *skiepmelke*.「彼女はまだ {あの/ Ø} 羊の乳をしぼらなければならない」(skiepmelke「羊の乳をしぼる」, Dijk 1997：41)

iii）*Pake is nei de polder te grouwe *bitewjudzjen*.「祖父は干拓地に灰色のビートを掘りに行った」(Dyk 1992 a：51 変更)

ただし，「形容詞＋名詞」で語彙的に 1 語として固定している場合には許される。

Pake is nei de polder te *reade bitewjudzjen*.「祖父は干拓地に赤カブを掘りに行った」(reade byt「赤カブ」) (ib. 51 変更)

iv）Hy wol de wyn drinke, dy't er juster kocht hat.「彼は昨日買ったワインを飲みたがっている」

Hy wol *wyndrinke*, {*dy't er juster kocht hat/ Ø}.「彼は {昨日

買った/Ø} ワインを飲みたがっている」

④ 代名詞化

Heit begûn {de karre/him} te triuwen.「父は {荷車/それ} を押しはじめた」

Heit begûn te{*karretriuwen*/**himtriuwen*}.「同上」(karretriuwe「荷車を押す」, Dijk 1997：133)

(c) その他の統語的な制約

被抱合名詞には独立の名詞句で可能な統語現象が許されないことがある。定動詞の主文第2位への移動や te＋不定詞での分離ができず，空所化も起こらない。

① 主文第2位への移動，te＋不定詞での分離

Ik slypje de messen.「私はナイフをとぐ」(Dijk 1997：4 変更)

Ik {*messeslypje*/**slypje messe*}.「同上」(ib. 4 変更)

Ik holp har de messen te slypjen.「私は彼女にナイフをとぐのを手伝った」

Ik holp har {te *messeslypjen*/**messe* te *slypjen*}.「同上」

② 空所化 (Dijk 1997：22)

Anneke wol apels ite en Jantsje parren $__i$.「アネケはリンゴを食べたがり，ヨンチェは梨を食べたがる」

⇔*Anneke wol *apelite*$_i$ en Jantsje *parre* $__i$.「同上」

③ 等位接続での前方削除

これは可能である(合成語でも同様)。逆に，動詞句表現では許されない (Dijk 1997：22)。

*Anneke wol apels $__i$ en Jantsje parren ite$_i$.「同上」

⇔Anneke wol *apel*$__i$ en Jantsje *parreïte*.「同上」

(d) 語形成

抱合動詞は接頭辞 fer- などを伴って，非分離動詞を形成することがある。一般に，語形成の対象となる要素は1語となった語に限られるので，このことも抱合動詞が1語である証拠になる。

fersûpedrinke「脱脂粉乳の飲みすぎで胃を痛める」(fer- ＋sûpe「脱脂粉乳」＋drinke「飲む」) (Dijk 1997：91)

ferkaartspylje「トランプ遊びで損をする」(fer- ＋kaart「トランプ」＋spylje「遊ぶ」) (ib. 91)

(3) 形態的特徴：被抱合名詞の語形

被抱合名詞の語形は単数形語幹と異なることがある。

(a) 「接合の e」(ド．Fugen-e，フ．e-augumint) を伴う語

単数形語幹に「接合の e」を付加する語がある (Dijk 1997：33 ff.)。

parreïte「梨を食べる」(par「梨」＋ite「食べる」)

brieveskriuwe「手紙を書く」(brief「手紙」＋skriuwe「書く」)

stekkefervje「柵にペンキを塗る」(stek「柵」＋fervje「塗装する」)

hynsteride「乗馬をする」(hynst「馬」＋ride「(車・馬に) 乗る」)

「接合の e」がつかない語が併存することもあり，その有無には個人差もある。

parite「同上」/briefskriuwe「同上」/stekfervje「同上」

単数形語幹が -e で終わるものでは，「接合の e」の有無は不明である。

bonkeplúzje「骨をかじる」(bonke「骨」＋plúdzje「少しずつ食べる」)

tûkeseagje「枝切りをする」(tûke「枝」＋seagje「のこぎりで切る」)

「接合の e」には次のような特徴がある。

① 「接合の e」の条件

複数形が -en の名詞だけに付加される。

parreïte「梨を食べる」(par「梨」→複数形 parren)

brieveskriuwe「手紙を書く」(brief「手紙」→複数形 brieven)

stekkefervje「柵にペンキを塗る」(stek「柵」→複数形 stekken)

複数形が -s などの -en 以外の名詞にはつかない。また，-s は名詞抱合の接合要素にはならない (合成語の接合要素にはなる)。

apelite/*apeleite/*apelsite「リンゴを食べる」(apel「リンゴ」→複数形 apels)

finsterfervje/*finsterefervje/*finstersfervje「窓枠にペンキを塗る」(finster「窓」→複数形 finsters)

autowaskje/*autoëwaskje/*auto'swaskje「洗車する」(auto「車」→複数形 auto's＋waskje「洗う」)

② 「接合の e」の有無による意味の差

有無に揺れが認められる語では,「接合の e」は複数形の意味を誘発する。したがって,物質名詞では出ない。

i) Wy sille moarn *stekfervje*.「私たちは明日,柵にペンキを塗るつもりです」(Dijk 1997：35 変更)

ii) Wy sille moarn *stekkefervje*.「同上」(ib. 35 変更)

i) stekfervje は「1枚あるいは2枚以上塗装する」, ii) stekkefervje は「2枚以上塗装する」の意味に解釈されやすい。

その他の語では,単複両方の意味に解釈できる。

tûkeseagje「(1本あるいは2本以上) 枝切りをする」(tûke「枝」,単数形語幹 -e)

autowaskje「(1台あるいは2台以上) 洗車する」(auto「車」→複数形 auto's)

「接合の e」が複数形の -en と何らかの関係があることは否定できないが,被抱合名詞が複数形として現われることはない。

parreïte/*parrenite「梨を食べる」

brieveskriuwe/*brievenskriuwe「手紙を書く」

stekkefervje/*stekkenfervje「柵にペンキを塗る」

tûkeseagje/*tûkenseagje「枝切りをする」

(b) 「接合の e」を伴わない語

① 単数形語幹をそのまま使う語

balsmite「ボール投げをする」(bal「ボール」＋smite「投げる」)

rúthimmelje「ガラス拭きをする」(rút「ガラス」＋himmelje「掃除する」)

apelite「リンゴを食べる」(apel「リンゴ」＋ite「食べる」)

② 「割れ」を起こす語

fuotfeie [fwôtfaiə, . . fɛiə]「靴みがきをする」(foet [fuət]「足」+feie「掃く，掃除する」)

hierknippe [jĺrknIpə]「散髪する」(hier [hiər]「毛」+knippe「切る」)

hoasstopje [hwástɔpjə]「ストッキングをかがる」(hoas [hoəs]「ストッキング」+stopje「つくろう」)

③ 短母音化を起こす語

húshâlde [hýshɔ:də]「家計・家政をつかさどる」(hûs [hu:s]「家」+hâlde「保つ」)

hanwaskje [hónvɔskjə]「手洗いをする」(hân [hɔ:n]「手」+waskje「洗う」; hânwaskje も可)

aisykje [áisikjə]「(野鳥の) 卵探しをする」(aai [a:i]「卵」+sykje「探す」; aaisykje も可)

④ 語末の -e を欠く語形が併存する語

krantelêze/krantlêze「新聞を読む」(krante「新聞」+lêze「読む」)

fioelespylje/fioelspylje「ヴァイオリンをひく」(fioele「ヴァイオリン」+spylje「演奏する」)

molkedrinke「牛乳を飲む」(molke「牛乳」+drinke「飲む」) (WFT 13/1996：373)

⇔molkfarre「牛乳を船で運ぶ」(molke「牛乳」+farre「船で運ぶ」) (ib. 370)

⑤ 縮小形を用いる語

小さな事物を意味する場合。

beantsjetriedzje「インゲンの筋をとる」(beantsje ← bean「インゲン」+triezdje「(豆などの) さやをとる」)

blomkenaaie「花の刺繍をする」(blomke ← blom「花」+naaie「縫う」)

子供の遊びや親しみなどの感情がこもった表現。

fjurkestoke「火遊びをする」(fjurke ← fjoer「火」+stoke「(火を) 起こす」)

tomkesobje「親指しゃぶりをする」(tomke ← tomme「親指」+sobje「しゃぶる」)

rôltsjeride「ローラースケートをする」(rôltsje ← rôle「ローラー」+ride「(車などで) 行く」)

boatsjefarre「船遊びをする，ボートをこぐ」(boatsje ← boat「ボート」+farre「(船で) 行く」)

縮小形接尾辞は「接合の e」と同様に，接合の要素としてはたらいているともいえる(Dijk 1997：36, Hoekstra 1998：56)。これは合成語でも縮小形接尾辞がつくものがあることと関係がある。

goudsjeblom「マリーゴールド (植物)」(goudsje ← goud「金」+blom「花」)

skipkelju「居住用の船に住む人々」(skipke ← skip「船」+lju「人々」)

(c) 被抱合名詞と合成語成分の語形

単数形と異なる被抱合名詞の語形は，合成語の成分に用いることがある。

抱合動詞　fuotfeie [fwôtfaiə, ... fɛiə]「靴みがきをする」

～合成語　fuotbal [fwôtbɔl]「サッカー」(foet「足」→ fuot-,「割れ」)

húshâlde [hýshɔ:də]「家計・家政をつかさどる」

～húsfrou [hýsfrɔu]「主婦」(hûs「家」→ hús-, 短母音化)

parreïte「梨を食べる」～parrebeam [párəbIəm]「梨の木」(par「梨」→ parre-, -e の付加)

☞ オランダ語でも -en とならんで -e を合成語の成分に用いることがあったが，標準語の発音では -en と区別がなく，1995 年の正書法改革以来，-en に統一された。

フ．parrebeam「梨の木」⇔オ．perenboom「同上」(←古 pereboom)

フ．messelizzer「ナイフ置き」⇔オ．messenlegger「同上」(←古 messelegger)

フ．messemakker/mesmakker「刃物師」⇔オ．messenmaker「同上」(＝古 messenmaker)

(4) 形態的特徴：抱合動詞の語形変化

抱合動詞はもとの動詞の語形変化を継承する。強変化動詞は名詞抱合に

よって抱合動詞になっても，強変化のままである。

i）強変化　drinke「飲む」－過去形 dronk－過去分詞 dronken
　強変化　teedrinke「お茶を飲む」－過去形 teedronk－過去分詞 teedronken

ii）強変化　skriuwe「書く」－過去形 skreau－過去分詞 skreaun
　強変化　brieveskriuwe「手紙を書く」－過去形 brieveskreau－過去分詞 brieveskreaun

☞ オランダ語やドイツ語では，強変化動詞をもとにした抱合動詞は弱変化動詞になることが多い。

オ．強変化　zuigen「吸う」－過去形 zoog－過去分詞 gezogen
　弱変化　stofzuigen「電気掃除機で掃除する」－過去形 stofzuigde－過去分詞 gestofzuigd
　強変化　houwen「彫る，削る」－過去形 hieuw－過去分詞 gehouwen
　弱変化　beeldhouwen「彫刻する」－過去形 beeldhouwde－過去分詞 gebeeldhouwd

ド．強変化　saugen「吸う」－過去形 sog/saugte－過去分詞 gesogen/gesaugt)（「電気掃除機で掃除する」という意味では弱変化）
　弱変化　staubsaugen「電気掃除機で掃除する」－(過去形 staubsaugte)－過去分詞 staubgesaugt
　強変化　preisen「ほめる」－過去形 pries－過去分詞 gepriesen
　弱変化　lobpreisen「賛美する（文語的）」－過去形 lobpreiste/lobpries－過去分詞 gelobpreist/lobgepriesen (Duden Bd. 6/1999³：2447), lobgepriesen/lobgepreist (Brockhaus-Wahrig 4. Bd./1982：506)

(5) 意味的特徴

(a) 被抱合名詞の意味的特徴

(2)(b)と(3)(a)で述べたように，被抱合名詞は総称的・典型的な意味を表わし，単数・複数の区別を含意せず，具体的・個別的な指示物は示さない。ただし，感情的な強調表現に限って例外的に見られることがある。

No moatte jim ophâlde te *Fritsnarjen*.「もうフリッツいじめはやめなさいよ」(Dijk 1997：67)

☞ オランダ語フローニンゲン方言（オ．Gronings）では固有名詞もふつうに抱合できる。

Nou mot je ophollen te *Piter Moatje pesten*.「もうピテル・モアチエをいじめるのはやめなさいよ」(Schuurman 1987：186)

(b) 抱合動詞の意味的特徴：アスペクトと意味的拡張

① 継続・反復

抱合動詞は動作の継続の意味を表わす傾向が強く，瞬間的な動作や完結･完了を含意する表現には適さない。つまり，「行為動詞」(エ. activity verb) である。

i) Gurbe *stekferve* {*yn in oere/oerenlang}.「グルベは柵を｛1時間で塗装し終えた／何時間も塗装していた｝」(stekfervje「柵を塗装する」, Dijk 1997：35) (ib. 47 変更)

Gurbe ferve it stek yn in oere.「グルベは柵を1時間で塗装し終えた」(ib. 47 変更)

ただし，反復的な動作の場合には全体として継続性が表現されるので，抱合動詞が許される。

ii) Boukje *knyndeadet* oerenlang.「バウキエは何時間もウサギを屠殺している（＝何匹も立て続けに屠殺している)」(ib. 102 変更)

Boukje deadet oerenlang kninen.「同上」(ib. 102 変更)

② 習慣・性質・能力

抱合動詞は動詞句表現と対比すると，個々の1回限りの動作よりも習慣的動作を表わしやすく，動作の遂行よりも主語の性質や能力を表わしやすい（ただし，義務的にそうである必要はない)。

i) Us mem *bôlebakt* {al jierren/?Ø} mei nocht.「母は｛もう何年も/Ø｝好きでパンを焼いている(習慣)」(bôlebakke) (Dijk 1997：29 変更)

Us mem bakt mei nocht in bôle.「母はパンを焼くのが好きだ」(ib. 29 変更)

ii) Tsjitske *gitaarspilet*.「チツケはギターがひける（能力)」(gitaarspylje) (Hoekstra 1998：61 変更)

Tsjitske spilet gitaar.「チツケはギターをひいている」(ib. 61 変更)

③ 制度的・儀礼的・社会的行為，比喩

語彙的に固定した抱合動詞の中には，動詞句表現に比べて，全体でまとまった概念を形成し，制度的・儀礼的・社会的行為や比喩を表わしやすいものがある。

i) Wy *kofjedrinke* om trije oere.「私たちは3時にコーヒーブレイクの時間を取る（＝お茶にする）」（コーヒーを飲み，菓子などを食べ，談笑し，くつろぐ）(Dijk 1997：51 変更)

Wy drinke om trije oere kofje.「私たちは3時にコーヒーを飲む」(ただコーヒーを飲むだけ) (ib. 51 変更)

ii) skûtsjesile「ヨット遊び（スクチエシレン）をする（＝フリースラントの伝統的なスポーツ）」

mei in skûtsje sile「ヨットに乗る（＝ただ乗るだけ）」

iii) komelke「(小さな) 牧畜業を営む，牛の乳をしぼる」

{in ko/kij} melke「牛 {単数/複数} の乳をしぼる」

iv) Klaas *fytsmakket*.「クラースは自転車修理・製造を職業にしている」(fytsmeitsje) (Dyk 1992 a：57)

Klaas makket in fyts.「クラースは自転車を（素人として）修理・製造している」(ib. 57)

v) kieskauje「いやいや（まずそうに）食べる」(kies「砂利」+kauje「噛む」)

(c) 抱合動詞の意味的特徴：主題関係

名詞抱合は，動作主主語による意図的な動作が，抱合動詞の意味役割を充足する被抱合名詞に，直接的な影響を及ぼす場合に限られる。

① 名詞抱合：可

It bern *plaatsjekleuret*.「子供はプレートに色を塗っている」(plaat「プレート」+kleurje「彩色する」) (Dijk 1997：変更)

It bern *faasbrekt*.「子供が花瓶を割っている」(faas「花瓶」+brekke「割る」) (ib. 79 変更)

Minne *radioharket*.「ミネはラジオを聞いている」(radio「ラジオ」+

harkje「(注意して) 聞く (nei ... を)」) (ib. 101 変更)

Bonne *balsmiet*. Oege *balsloech* mei in stôk.「ボネがボールを投げた。ウーヘが棒でボールを打った」(bal「ボール」+smite「投げる」/slaan「打つ」) (ib. 96 変更)

② 名詞抱合：不可

*De ûndergeande sinne *hûskleuret*.「沈む太陽の光が家々を照らしている」(hûs「家」+kleurje「彩色する」) (Dijk 1997：97)

*De bal *faasbrekt*.「ボールが当たって花瓶が割れている」(ib. 79 変更)

**Loltsje autoheart*.「ロルチエには車の音が耳に入ってくる」(auto「車」+hearre「聞こえる」) (ib. 100 変更)

*Beart *kadootsjekrige* de hiele dei.「ベアトは一日中，プレゼントをもらっていた」(kadootsje「プレゼント」+krije「得る」) (ib. 97 変更)

(6) 統語的特徴：被抱合名詞

(a) 直接目的語の抱合

他動詞の直接目的語は抱合されやすい。ただし，動作主が示す意図的な動作によって，直接的な影響を被る被動作主の場合に限る。(5)(c)など，すでに挙げた多数の用例を参照。

(b) 前置詞句目的語の抱合

道具・目標・場所などを示す前置詞句内に現われる名詞も，動作主が示す意図的な動作によって直接的な影響を被り，動詞の意味役割を充足する場合には，抱合できることが多い (Dijk 1997：137 ff)。

① 道具

fisksutelje「魚の行商をする」(mei fisken「魚で」+sutelje「行商をする」)

masinemolke「機械で乳しぼりをする」(mei in masine「機械で」+molke「乳しぼりをする」)

tou(tsje)dûnsje/-springe「縄跳びをする」(tou(tsje)「縄」+dûnsje「踊る」/springe「はねる」)

② 目標

einsjitte「カモをねらい撃ちする」(op in ein「カモに向かって」+sjitte「射撃する」)

ikelsykje「どんぐり拾いをする」(nei in ikel「どんぐりを求めて」+sykje「探す」)

③ 場所

bêdmige「おねしょをする」(op in bêd「ベッドの上で」+mige「小便をする」)

pianospylje「ピアノをひく」(op 'e piano「ピアノ(の鍵盤)の上で」+spylje「演奏する」)

sleatsjespringe「側溝を飛び越す」(oer in sleatsje「側溝の上を」+springe「飛び越す」)

autoride「車を運転する」(yn in auto「車の中で」+ride「運転する」)

④ 時間

稀に見られるにとどまる。

jûnprate/-pizelje「晩に訪問する」(jûn「晩」+prate「話す」/pizelje「楽しく共にいる」)

jûnfrije「晩に恋人を訪ねる」(frije「求愛する」)

nachtbrake「徹夜で仕事をする，飲み明かす，夜遊びする」(nacht「夜」+brake「夜に活動する（古語）」)

bêdmige「おねしょをする」とは言えても，*bêdlêze「寝床で本を読む」と言えないのは，mige「小便をする」と違って，lêze「読書する」では bêd「ベッド」に直接的な影響が及ぶとは考えにくいためである。同様に，autoride「車を運転する」は運転手が直接，自動車の運転する場合に限られ，タクシーの乗客のように同乗するだけの場合には使えない。このときには，yn in auto ride「車に乗る」と表現する (ib. 142)。つまり，たんに動作を類別する場合には，名詞抱合は起こらない。

(c) 主語の抱合

他動詞，および能格動詞・非能格動詞の区別なく自動詞一般の主語は抱合

されない。次の天候動詞では可能だが，これは非人称動詞である。

sniewiskje/-jeie「吹雪く」(snie「雪」+{wiskje「吹きまくる」/jeie「疾駆する」})

De snie hat {wiske/jage}.「吹雪いた」(Dijk 1997：163)

→It begjint te *sniewiskjen*.「吹雪になる」(ib. 76)

It *sniejaget*.「吹雪いている」(Zantema 1984：936)

主語を抱合すると，無主語構文が生じることになるが，西フリジア語には能動態で無主語構文がない。したがって，主語の抱合は統語論的に不可能である。ただし，虚辞としての非人称代名詞 it を有する非人称動詞ではそれが許される。この場合，wiskje「吹きまくる」/jeie「疾駆する」は能格動詞であり，snie「雪」はその「内項」(エ. internal argument) である。ただし，他の天候動詞はほとんど抱合動詞ではない。

抱合動詞は主語を欠く非人称受動でも，受動の助動詞に支配された過去分詞として現われる。

i) Der {wurdt in apel/wurde apels} iten.「リンゴが食べられている」(人称受動) (Dijk 1997：114)

ii) Der wurdt *apeliten*.「同上」(非人称受動) (ib. 114)

i) の in apel/apels「リンゴ (単数/複数)」は内項としての主語であり，ii) のように抱合動詞を使うことができる。これは能動態で apelite「リンゴを食べる」という抱合動詞が使えるのと同じである。このように，主語の抱合は内項としては可能な余地があるが，統語的な制限が強く，稀である。

なお，noasbliede「鼻血が出る」は「鼻が (noas) 出血する (bliede)」ではなく，「彼は鼻から出血している」(Hy blet út 'e noas.) という場所の表現に由来し，主語の抱合ではない。

☞ 日本語には「泡立つ」(←泡が立つ) のように，能格動詞 (非対格動詞) の主語が抱合される例がある。日本語では「外項」(エ. external argument) としての非能格動詞の主語は抱合できないが，内項ならば主語も抱合できる (影山 1993：197，1997：44)。一方，西フリジア語では skom/skûm「泡」という名詞から接尾辞 -je によって，skomje/skûmje「泡立つ」という動詞を品詞転換によって派生する。

(d) 接頭辞 be- との比較

直接的な影響を被る目的語を対象とするという点では，動作の影響が目的語全体に及ぶことを示す接頭辞 be-（オ./ド. be-）も類似している（Veenstra 1988：149 ff.）。ただし，名詞抱合からは前置詞句としての補足成分を伴わない自動詞が生まれ（(b)参照），接頭辞 be- からはそのような補足成分を伴うことのできる他動詞が生まれる。

bûter op in stikje bôle smarre「1枚のパンにバターをぬる」
→in stikje bôle mei bûter besmarre「パンをバターでぬりつくす」
{*mei bûter/ Ø} bôlesmarre「パンに（バターなどを）ぬる」
op 'e piano spylje「ピアノをひく」
→ pianospylje/piano bespylje「同左」
De boer belade de wein mei hea.「農夫は干し草を積んで車を一杯にした」
De boer *weinlade* {*mei hea/ Ø}.「農夫は車に {干し草を/（荷物を）} 積んでいた」（Dijk 1997：153）

また，すべての動詞句表現が名詞抱合と接頭辞 be- の両方に対応するわけではない。

oer in sleatsje springe「側溝を飛び越す」→ sleatsjespringe/*in sleatsje bespringe「同左」（ib. 144）
op in ein skine「(おびき寄せるために)カモに照明を当てる」
→*einskine/in ein beskine「同左」（ib. 144）

(7) 統語的特徴：抱合動詞の項構造

名詞抱合は動詞の支配関係，すなわち，「項構造」（エ. argument structure）を変化させる。

(a) 直接目的語

「直接目的語＋動詞」の名詞抱合は他動詞の自動詞化に相当する。抱合動詞は被抱合名詞と同族の直接目的語を支配できない。

Buorman *autohimmelet* alle sneinen {**syn BMW* / Ø}.「隣人は日曜

日にはいつも{自分の BMW を/ Ø} 車掃除をする」(auto「車」+himmelje「掃除する」) (Dijk 1997：40 変更)

(b) その他の「補足成分」(エ. complement)

直接目的語以外に動詞との結びつきが強い補足成分を含む構文では，名詞抱合を行なうと，統語的に名詞抱合が不可能になる。

① 間接目的語

De listlûker jout de besikers plakplaatsjes.「筆頭候補者は訪問客にポスターを配っている」(Dijk 1997：77 変更)

→*De listlûker *plakplaatsjejout* de besikers.「同上」(ib. 78 変更)

② 道具・方向など

Heit set de boeken op it rim.「父は書棚に本を並べている」(Dijk 1997：146 変更)

→ Heit *boekset* {*op it rim/ Ø}.「父は {書棚に/ Ø} 本を並べている」(ib. 146 変更)

De boer lade de wein mei hea.「農夫は車に干し草を積んでいた」(ib. 78 変更)

→ De boer *weinlade* {*mei hea/*hea/ Ø}.「農夫は車に {干し草を/干し草を/ (荷物を)} 積んでいた」(ib. 78, 153 変更)

De boer lade hea op 'e wein.「農夫は干し草を車に積んでいた」(ib. 153 変更)

→ De boer *healade* {*op 'e wein/*de wein/ Ø}.「農夫は干し草を {車に/車に/ Ø} 積んでいた」「同上」(ib. 152 f. 変更)

③ 「小節」(エ. small clause)

Mem bakt de bôle brún.「母はパンを小麦色に焼いている」(Dijk 1997：149 変更)

→ Mem *bôlebakt* {*brún/ Ø}.「母はパンを {小麦色に/ Ø} 焼いている」(ib. 149 変更)

Kees tekenet fûgels sturtleas.「ケースは鳥たちを尻尾なしに描いている」(ib. 115 変更)

→ Kees *fûgeltekenet* {*sturtleas/ Ø}.「ケースは鳥たちを {尻尾なしに/ Ø} 描いている」(ib. 115 変更)

④ 再帰代名詞

jin baaie「水浴びする，入浴する」→{*jin/ Ø} sinnebaaie「日光浴する」(sinne「太陽」)

⑤ 直接目的語以外の補足成分が複数ある場合

この場合も同様に名詞抱合ができない。

Ik keapje altiten bôle fan 'e bakker foar fiif gûne.「私はいつもパン屋から 5 ギルダーで白パンを買う」(ib. 154 変更)

→ Ik bôlekeapje altiten {*fan 'e bakker/*foar fiif gûne/*fan 'e bakker foar fiif gûne/ Ø}.「私はいつも {パン屋から/ 5 ギルダーで/パン屋から 5 ギルダーで/ Ø} 白パンを買う」(ib. 154 変更)

(c) 「付加成分」(エ．adjunct)

所有の与格のような「自由な与格」や場所を示す前置詞句のように，動詞との結びつきが弱い付加成分を伴う他動詞構文では，名詞抱合は可能である。

たとえば次の用例では，op 'e rûchskerne は方向の意味 (「堆肥の山の上に向かって」) では補足成分だが，場所 (位置) の意味 (「堆肥の山の上に立って」) では付加成分であり，あいまいである。しかし，名詞抱合を伴うときには後者の意味に限られる。

Jelle lege de jiskepanne op 'e rûchskerne.「イエレは {堆肥の山の上に向かって/堆肥の山の上に立って} 灰皿を空にしていた」(ib. 160)

→ Jelle *jiskepannelege* op 'e rûchskerne.「イエレは {＊堆肥の山の上に向かって/堆肥の山の立って} 灰皿を空にしていた」(ib. 160)

所有の与格のような「自由な与格」や場所 (位置) を示す前置詞句は，名詞抱合によって直接目的語に統語的に昇格することがある。

① 所有の与格

i) Sy wol him it hier knippe.「彼女は彼の髪を切ろうと思っている」(所有の与格 him「彼」) (Dijk 1997：41，157 変更)

→ Sy wol him *hierknippe*.「彼女は彼を散髪しようと思っている」(直

接目的語 him「彼」)(ib. 41, 156 変更)

ii) Him moat it hier knipt wurde.「彼は髪を切ってもらう必要がある」(受動態, 主語 it hier「髪」)(ib. 41, 157 変更)

→ Hy moat *hierknipt* wurde.「彼は散髪してもらう必要がある」(受動態, 主語 hy「彼」)(ib. 41, 157 変更)

② 場所(位置)

i) Ik moat yn 'e keamer noch behang plakke.「私は部屋の中にまだ壁紙を貼らなければいけない」(Dijk 1977 : 158 変更)

→ Ik moat de keamer noch *behangplakke*.「同上」(直接目的語 de keamer「部屋」)(ib. 158 変更)

→ De keamer moat noch *behangplakt* wurde.「その部屋はまだ壁紙を貼られなくてはいけない」(受動態, 主語 de keamer「部屋」)(ib. 42 変更)

ii) Wy sille yn 'e grutte seal noch de flier feie.「私たちは大広間の床もまだ掃除するつもりです」(ib. 158 変更)

→ Wy sille noch de grutte seal flierfeie.「同上」(直接目的語 de grutte seal「大広間」)(ib. 42, 158 変更)

→ De grutte seal sil noch *flierfage* wurde.「大広間はまだ掃除される予定です」(受動態, 主語 de grutte seal「大広間」)(ib. 158 変更)

次の例が示すように, 所有の与格以外の「自由な与格」は抱合できない。

Sy wol him de blikke meane.「彼女は彼のために芝生を刈ってやりたいと思っている」(him 利害の与格)(ib. 159 変更)

→*Sy wol him *blikkemeane*.「同上」(ib. 159 変更)

場所(位置)を示す前置詞句でも, 意図的な動作によって直接的な影響を被るものでなければ抱合できない。次の用例は, de tún「庭」が krantlêze「新聞を読む」という動作によって直接的な影響を被るとは考えにくいために, 非文になる。

Sake lêst de krante yn 'e tún.「サーケは庭で新聞を読んでいる」(ib. 160 変更)

→ Sake *krantlêst* {*de tún/ Ø}.「サーケは {庭で/ Ø} 新聞を読んでいる」(ib. 160 変更)

☞ オランダ語やドイツ語の抱合動詞も直接目的語を伴って他動詞として機能することがある。

オ. Marijke *stofzuigde* de kamer.「マレイケは部屋を電気掃除機で掃除した」(Dijk 1997：167 変更)

ド. Marie hat {den Fußboden/den Teppich} *staubgesaugt*.「マリーは {床を/じゅうたんを} 電気掃除機で掃除した」(Brockhaus-Wahrig 5. Bd. (1983：904) は staubsaugen が対格目的語伴うのは稀としている)

(8) 統語的制約

(a) 語彙的に固定していない抱合動詞

名詞抱合には統語的な制約がある (Dijk 1997：24 ff., Hoekstra 1998：57 f.)。語彙的に固定していない抱合動詞(例. waskmasinekeapje「洗濯機を買う」)でも問題なく現われることができるのは，次の 4 つの第 2 不定詞構文である。

① 第 2 不定詞の名詞用法

(It) waskmasinekeapjen is moedsum wurk.「洗濯機を買うのは骨の折れる仕事だ」

By *it waskmasinekeapjen* hat er yn 'e winkel syn freondinne met.「洗濯機を買っているときに，彼は店の中で恋人に会った」

② 「oan it＋第 2 不定詞構文」(進行中の動作)

Hy is *oan it waskmasinekeapjen*.「彼は洗濯機を買っているところだ」

③ te＋第 2 不定詞の前置詞用法

Hy giet nei de winkel ta *te waskmasinekeapjen*.「彼は店に洗濯機を買いに行く」

④ te＋第 2 不定詞の文用法

Syn freondinne helpt him *te waskmasinekeapjen*.「彼の恋人は彼に洗濯機を買う手伝いをする」

これ以外の構文では名詞抱合ができないことがある。この場合には動詞句表現を義務的に用いる。

⑤ その他の不定詞の用法

*Hy wol hjoed net *waskmasinekeapje*.「彼は今日，洗濯機を買いたくないと思っている」

*Hy freget syn freondinne *om* foar him *te waskmasinekeapjen*.「彼は恋人に自分のために洗濯機を買ってくれと頼む」

*Hy sjocht har *waskmasinekeapjen*.「彼は彼女が洗濯機を買うのを見ている」

⑥ 過去分詞

*Hy hat hjoed net *waskmasinekocht*.「彼は今日，洗濯機を買わなかった」

*Der waard net *waskmasinekocht*.「洗濯機が買われなかった」

⑦ 現在形・過去形

*Hy {*waskmasinekeapet/waskmasinekocht*} noait yn dizze winkel.「彼はけっしてこの店で洗濯機を {買わない/買わなかった}」

(b) 個々の動詞による相違

語彙的に固定した抱合動詞は，上記の統語的制約から自由なことがある。制約の強さは，語彙的な固定の度合いに応じて，個々の動詞によって異なる。

① その他の不定詞の用法

Ik ha nea witten dat sy sa alderheislikste moai *kantklosse* koe.「私は彼女がそんなにすばらしくボビンレース織りが上手だとはまったく知らなかった」(kant「ボビンレース」+klosse「レース編みをする」) (ULI'S, B 19：14)

Loltsje seach Gurbe *apelplôkjen*.「ロルチエはグルベがリンゴを摘むのを見た」(apel「リンゴ」+plôkje「摘む」) (Dijk 1997：200 変更)

De buorlju ha ús frege, *om* jûn by *harren te hûswarjen*.「お隣さんが私たちに今夜，留守番をしてほしいと頼んだ」(hûs「家」+warje「守る」) (Hoekstra 1998：58 変更)

② 過去分詞

Heit hat hiel wat ôf *geitmolken*.「父はたくさんヤギの乳しぼりをし

た」(geit「ヤギ」+molke「乳をしぼる」) (Dijk 1997：115 変更)

Der wurdt *apeliten*.「だれかがリンゴを食べている (非人称受動)」(apel「リンゴ」+ite「食べる」) (ib. 114)

③ 現在形・過去形

Timen *aaisiket*.「ティメンは (野鳥の) 卵探しをしている」(aai「卵」+sykje「探す」) (ULI'S, A：19：13)

Sjerp *noassnute* wakker.「シエルプは大きく鼻をかんだ」(noas「鼻」+snute「(鼻を) かむ」) (Dijk 1997：30)

Hja *bibelliezen* en *psalmsongen* mei elkoar.「彼らはたがいに聖書を読み，賛美歌を歌いあった」(bibel「聖書」+lêze「読む」，psalm「賛美歌」+sjonge「歌う」) (WFT 2/1986：248 正書法変更)

☞ オランダ語やドイツ語でも抱合動詞は定形では一般に使いにくい。たとえば，ドイツ語の staubsaugen「電気掃除機で掃除する」について，Klappenbach/Steinitz (1978：3557) は現在形 staubsaugt と過去形 staubsaugte は一般に用いない (ungebrauchlich) と記している。オランダ語でも，たとえば Van Dale (1992[12]：2275) は pianospelen「ピアノをひく」は不定形でのみ用いる (alleen op onbep. wijs) と記している。

(c) 統語的制約の存在理由

上記の統語的制約は，抱合動詞が動詞句表現と競合することと関係がある。たとえば，語彙的に固定した抱合動詞のなかには，対応する動詞句表現を例外的に欠くものが少数あるが，そのような抱合動詞ではとくにこの制約が弱い。

sykhelje「呼吸する」⇔*(de) syk helje「同左」

Hja *sykhellet* rêstich.「彼女は静かに息をしている」(Dijk 1997：31 変更)

⇔*Hja hellet rêstich (de) sike.「同上」(ib. 31 変更)

immen net *sykheljen* hearre meie「ある人がいやでたまらない (＝ある人の息づかいを聞くに耐えない)」(Zantema 1984：860)

⇔*immen net (de) sike heljen hearre meie「同上」

一方，対応する動詞句表現が存在し，語彙的に固定していない抱合動詞は，

上記の(a)の①から④までの構文に限られる。

そのような構文では，名詞句が動詞の左側に隣接する動詞句表現は不可能である。

① 第2不定詞の名詞用法

{*(It) in waskmasine keapjen/*(It) waskmasinekeapjen*} is moedsum wurk.「洗濯機を買うのは骨の折れる仕事だ」

By {*it in waskmasine keapjen/*it waskmasinekeapjen*} hat er yn 'e winkel syn freondinne met.「洗濯機を買っているときに，彼は店の中で恋人に会った」

② 「oan it＋第2不定詞構文」(進行中の動作)

Hy is {*oan it in waskmasine keapjen/*oan it waskmasinekeapjen*}.「彼は洗濯機を買っているところだ」

③ 第2不定詞の前置詞用法

Hy giet nei de winkel ta {*te in waskmasine keapjen/*te waskmasinekeapjen*}.「彼は店に洗濯機を買いに行く」

④ 第2不定詞の文用法

Syn freondinne helpt him {*te in waskmasine keapjen/*te waskmasinekeapjen*}.「彼の恋人は彼に洗濯機を買う手伝いをする」

①で名詞句 in waskmasine「洗濯機」を用いるには，前置詞句にしなければならない。

It keapjen fan in waskmasine is moedsum wurk.「同上」

By it keapjen fan in waskmasine hat er yn 'e winkel syn freondinne met.「同上」

②では oan it の左側に名詞句を置く動詞句表現ならできる。

Hy is in waskmasine oan it keapjen.「同上」

しかし，不定詞の左側に名詞句が隣接するときには，動詞句表現は許されない。

③と④では te の左側に名詞句を置くことはできない。これはオランダ語やドイツ語にはない不定詞の用法である（Hoekstra 1997：84 ff.)。

*Hy giet nei de winkel ta in waskmasine te keapjen.「同上」

*Syn freondinne helpt him in waskmasine te keapjen.「同上」

したがって，①から④までの構文で名詞句を動詞の左側に隣接させる場合には，名詞抱合によって名詞句を動詞に取りこまなくてはならない。一方，他の構文ではそのような必要はなく，逆に名詞抱合は制約を受ける。例：知覚動詞構文

Hy sjocht har {in waskmasine keapjen/**waskmasinekeapjen*}.「彼は彼女が洗濯機を買うのを見ている」

☞ ③と④では，冒頭に om をつけて不定詞句を導入すれば，動詞句表現が可能である。しかし，これは不定詞の別の用法による構文であり，逆に，抱合動詞は許されなくなる。

Hy giet nei de winkel ta {om in waskmasine te keapjen/**om te waskmasinekeapjen*}.「同上」

Syn freondinne helpt him {om in waskmasine te keapjen/**om te waskmasinekeapjen*}.「同上」

☞ 知覚動詞構文の第２不定詞（「en- 不定詞」）は古くは現在分詞だった。意味的にも名詞的な性質は強くない。

(9) 存在理由

他のゲルマン語とは異なって，西フリジア語(あるいはフリジア語群一般)ではなぜこのような名詞抱合が可能なのだろうか。歴史的・類型論的視点を交えて説明してみたい。

西フリジア語の名詞抱合はオランダ語やドイツ語と同様に，合成名詞的表現からの「逆成」（フ．de tebekfoarming，エ．back-formation）によると考えられる。

オ．stogzuiger「電気掃除機」→ stofzuigen「電気掃除機で掃除する」

ド．Staubsauger「同上」→ staubsaugen「同上」

しかし，西フリジア語の「逆成」は純粋な合成名詞から行なわれるのではない。なぜなら，西フリジア語には，ドイツ語やオランダ語には見られない，名詞的な性質と動詞的な性質をあわせもつ第２不定詞（「en- 不定詞」）が存在するからである。

(8)(a)の①から④の構文は，いずれも第2不定詞による（①では部分的に第1不定詞（「e-不定詞」）も可）。とくに，不定詞の前置詞用法（③）と文用法（④）はドイツ語やオランダ語には見られない。不定詞の章で述べるように，第2不定詞は第1不定詞よりも名詞的な性質が強く，動詞的な性質が弱いので，上記の用法では目的語名詞句を直接支配できない。したがって，動詞句表現は不可能であり，その名詞的性質によって「逆成」がなされると考えられる。つまり，たとえば kofjedrinke「コーヒーを飲む」という抱合動詞は，'kofje「コーヒーを」+drinken「飲む（こと）」' の -en が drink- だけでなく，kofjedrink- 全体に及ぶように再解釈された結果と考えられる。西フリジア語の第2不定詞の語尾 -en は名詞的性質が強いので，kofjedrinken の kofje は drinken に支配された目的語名詞句とは理解されず，kofje と drinken というふたつの名詞的表現がひとつになって，kofjedrinken 全体で合成名詞的な表現を形成することになる。一方，-en は動詞的性質も兼ね備えているので，kofjedrinken から -en を除けば，残りの部分は動詞語幹としても理解されやすい。これに第1不定詞の語尾 -e が付加されて，kofjedrinke という抱合動詞が形成される。

$$《[\text{kofje}]_N + \langle[\text{drink-}]_V[\text{en}]_N\rangle_N》_N$$
$$\rightarrow《\langle[\text{kofje}]_N[\text{drink-}]_V\rangle_V + [\text{en}]_N》_N$$
$$\rightarrow《\langle[\text{kofje}]_N[\text{drink-}]_V\rangle_V + [\ \text{e}\ ]_V》_V$$

ドイツ語やオランダ語と違って，西フリジア語の語形変化の種類が名詞抱合によっても変わらない（すなわち，強変化動詞は強変化のままであること）のは，ドイツ語やオランダ語では名詞抱合が純粋な合成名詞からの「逆成」に由来するために，抱合以前の動詞的特徴が抱合動詞に浸透しないのにたいして，西フリジア語では不定詞（＝第2不定詞）に由来するために，そのような浸透が容易になされるからである（Dijk 1997：165 ff., Hoekstra 1998：58）。

こうした名詞抱合は語彙的に固定すると，上記の不定詞構文以外にも広く用いられ，定形でも許されるようになる。名詞抱合の生産性が高く，新しい抱合動詞が容易に生まれるのは，不定詞からの「逆成」が現代の西フリジア

語の語形成規則に存在するためであり，統語的・意味的な条件にかなった場合に多用されるのだと考えられる。

このように，西フリジア語の名詞抱合は，第2不定詞の -en という形態的な根拠に支えられた一部の構文で現われやすく，統語的に条件づけられている。また，抱合動詞は他動詞を自動詞化するなど，動詞の項構造を変化させる統語的な役割を担う。しかし，抱合動詞には kofjedrinke「コーヒーを飲む」のような「名詞＋動詞」型の動詞句表現に対応するもののほかに，「前置詞句＋動詞」型の動詞表現に対応するものも数多くある（例．pianospylje「ピアノをひく」←[op 'e piano]$_{PP}$[spylje]$_{V}$)。加えて，名詞抱合の可否は意味的な条件に強く依存し，抱合動詞にはしばしば意味的な拡大が認められる。さらに，被抱合名詞の語形は単数形や複数形とも異なり，部分的に合成語の成分と共通している。そして何より，抱合動詞は1語である。以上のことは，西フリジア語の名詞抱合が形態的な根拠に基づく統語的な操作によるものではなく，意味的な制約を伴った生産的な語形成規則であることを示している。

☞ Dijk（1997：185 f.）は第2不定詞からの「逆成」は，西フリジア語では統語的現象として過去に起こったのであり，通時的（diachronic）なレベルに属し，その影響が現代語にも残っているものの，今日では語彙的（lexical）で，しかも生産的な（productive）な現象に変化していると考えている。この説明では歴史的な立場を混入することによって，現代西フリジア語の名詞抱合の性格づけがあいまいになってしまっている。
ちなみに，歴史的には，名詞抱合の例は古フリジア語にはなく，中期フリジア語から見られるようになる（最古の例は1599年。ib. 172)。
類型論的に見ると，ゲルマン語のなかでは，同じく第2不定詞を有する北フリジア語や東フリジア語（東フ．Seeltersk）に，西フリジア語にほぼ比肩できるような広範囲にわたる名詞抱合が存在する（Dyk 1992 b)。また，地理的に西フリジア語の東側に隣接するオランダ語フローニンゲン方言（オ．Gronings）にも存在するが，これはフリジア語の基層に由来するという説がある（Dijk 1997：192)。ただし，北フリジア語フェリング方言（北フ．fering）とオランダ語フローニンゲン方言の名詞抱合は不定形に限られており，頻度も生産性もそれほど高くない（ib. 195 f.)。
西フリジア語では上述のように，名詞抱合が義務的な構文があるが，北フリジア語や東フリジア語，それにオランダ語フローニンゲン方言では，すべての構文において名詞句表現が競合し，名詞抱合が衰退する傾向が認められ

る。すでに述べたように，名詞抱合はアスペクトや限定・修飾の点で制約があり，動詞句表現に比べて使用範囲が狭いことも，この傾向に拍車をかけている（ib. 197 ff.）。

英語は不定詞（例．to eat）にたいして動名詞（例．eating）を区別する点で，西フリジア語と共通している。合成動詞にも -er のほかに -ing を伴う合成名詞からの逆成によるものがある（typewriting → to typewrite，sight-seeing → to sight-see）。ただし，直接目的語よりも前置詞句として現われる副詞的な文成分を含むものが圧倒的に多く，前者の型の合成動詞は定形で現われにくく，完全な動詞になりきっていない（例．they go sight-seeing ⇔ *they sight-saw）（影山 1997：51 f.）。これは英語の語順が VO 型であることと関係がある。名詞性の強い動名詞 -ing という明確な形態的手段があっても，「直接目的語＋動詞」という語順を義務的に形成する構文は，英語にはとくに認められない。したがって，動名詞による合成名詞的な表現が合成動詞的な表現に再解釈される統語的条件が整わず，抱合動詞が形成されにくいと考えられる（ib. 193 ff.）。

それでは，最後に，名詞抱合にたいして，「小辞抱合」（前置詞と同形であることが多い小辞（エ．particle）が抱合されて抱合動詞を形成する現象）がなぜ西フリジア語に見られないのかということについて考えてみよう。この種の合成動詞は，オランダ語やドイツ語と同様に，抱合動詞ではなく，いわゆる分離動詞を形成することが多い。例．

フ．oankomme「到着する」（hy komt ... oan「彼は到着する」）

オ．aankomen「同上」（hij komt ... aan「同上」）

ド．ankommen「同上」（er kommt ... an「同上」）

しかし，上で述べたような第 2 不定詞による構文では，名詞抱合の場合と同様に，小辞部分と動詞部分が義務的に隣接して現われるので，逆成による抱合が起こってもおかしくない。

Hja giet {*te oprêden*/*op te rêden}.「彼女は片付けに行く」（oprêden「片付ける（分離動詞）」）（Hoekstra 1997：86）

Hy giet {*te hierknippen*/*(it) hier te knippen}.「彼は散髪しに行く」（hiernippe「散髪する（抱合動詞）」）（ib. 86 変更）

このことは次のように説明される。名詞抱合の特徴は，抱合以前の名詞句にたいして被抱合名詞が個別的な特定の指示物を示さず，これと意味的に呼

応するように，抱合以前の動詞句表現にたいして抱合動詞が完結・完了を含意しない継続アスペクトを示す「行為動詞」(エ．activity verb) になり，また，他動詞を自動詞化するように動詞の項構造を変化させる点に求められる。これにたいして，小辞抱合はこの特徴をひとつも満たさず，逆に，これと対立する性質を示す。すなわち，小辞はそもそも個別的・特定的指示物とは無縁であり，完結・完了のアスペクトを示す「達成動詞」(エ．achievement verb) や「完成動詞」(エ．accomplishment verb) を形成しやすく，名詞抱合とは逆に自動詞を他動詞化することがある。

西フリジア語の抱合による非分離の合成動詞形成は名詞抱合に典型的に見られるとすれば，このように，小辞抱合は名詞抱合と共通点がほとんどなく，反対にこれと相容れない点があるために起こらず，OV 型の西ゲルマン語に共通のいわゆる分離動詞にとどまると考えられる。ちなみに，次に述べる形容詞抱合は，継続アスペクトを示し，自動詞の他動詞化も起こさず，少なくとも名詞抱合と相容れない点を有するわけではないために，数が少なく，生産性が高くはないものの，動詞の意味役割を充足する手段としての類推から，許容されないわけではないと考えられる。

§85　名詞抱合に類する現象

(1)　類別的名詞抱合

[動詞＋名詞]：$[VN]_V$

名詞抱合とは逆の語順による非分離の合成動詞である。生産性は低く，少なくとも 30 語程度が確認できる。名詞は身体部位であり，おもに道具としての役割をはたす。主語や直接目的語に相当するものも少数ある。主語の制御内にある反射的・本能的・感情的動作を示し，前半部分の動詞の下位分類としての動作を示す。たとえば，stampfuotsje「足踏みする」は foet「足」による stampe「踏みつける」の動作である。これは上述したような動詞の意味役割を充足するタイプにたいして，動作を類別するタイプの名詞抱合といえる。ただし，語順と意味は大きく異なる。

stampfuotsje「足踏みする」(stampe「踏みつける」＋foet「足」)

stoareagje「目を丸くして見つめる」(stoarje「見つめる」+eage「目」)
skokskouderje「肩をすくめる(当惑・無関心などから)」(skokke「大きく振る」+skouder「肩」)
plokhierje「つかみあいのけんかをする」(plôkje/ploaits(j)e「摘む,むしる,引っぱる」+hier「髪」)
sûzebolje「頭がくらくらする,めまいがする」(sûzelje「ザワザワ音がする,耳鳴りがする」+bol「頭」)
skom-/skûmbekje「口角泡を飛ばす」(skomje/skûmje「泡立つ」+bek「(動物の)口」

「名詞+動詞」型の抱合動詞が併存する語も少数ある。

knars(el)toskje～toskeknarse「歯ぎしりする」(knarse「ギンギン音を立てる,きしむ」+tosk「歯」)(op 'e tosken knarse「同左」)
giselsturtsje～sturt(sje)giselje「しっぽを振る」(giselje「すばやく動かす,むち打つ」+sturt「しっぽ」)

☞ オランダ語ではそれぞれ stampvoeten, starogen, schokschouderen, plukharen, suizebollen, schuimbekken, knarsetanden という。オランダ語でも同様に少なくとも30語が確認できる(Weggelaar 1986, De Haas/Trommelen 1993:448f.)。ドイツ語と英語にはほとんど例がない。Dijk (1997:7f.) は名詞抱合とは認めていない。

(2) 形容詞抱合

副詞的に用いられた様態を表わす形容詞も動詞に抱合されることがある。

[形容詞+動詞]:A+V→$[AV]_V$

名詞抱合と同様に,アクセントは前半部分にあり,分離しない。しかし,名詞抱合に比べると数が少なく,生産性も高くない。

hurdrinne「疾駆する」(hurd「速い,速く」+rinne「歩く,走る」)
fierljeppe「フィエルリエペンをする(=水路に立てた棒にとびつき,対岸に届いた距離を競うフリースラントの伝統的競技)」(fier「遠い,遠く」+ljeppe「(棒を使って)とぶ」)
moaiprate「お世辞を言う」(moai「美しい,美しく」+prate「話す」)

(Hoekstra 1998：58)

kâldgniskje/-gnize「にやりと笑う，苦笑する，あざ笑う」(kâld「冷たい，冷たく」+gniskje/gnize「にやりと笑う，苦笑する，あざ笑う」)

raardwaan「妙なことをする」(raar「妙な，妙に」+dwaan「する」) (ib. 58)

domprate「ばか話をする」(dom「愚かな，愚かに」+prate「話す」) (ib. 58)

tsjokite「満腹になるまで食べる，食事に呼ばれる」(tsjok「太った」+ite「食べる」)

名詞抱合と同様に，ほとんどの場合に対応する動詞句表現があり，意味の異同も類似している。

hurdrinne「疾駆する」⇔hurd rinne「速く走る」

moaiprate「お世辞を言う」⇔moai prate「上手に話す」

fierljeppe「フィエルリエペンをする」⇔fier ljeppe「遠くまでとぶ」

構文上の制約も共通しており，語彙的に固定した語だけが不定詞構文一般や定形でも用いることができる。

Hy komt faak te *tsjokiten*.「彼はよくごちそうになりにやって来る」(Dijk 1997：7 変更)

Hy hold op te *raardwaan*.「彼は妙なことをするのをやめた」

Hy *fierljept* moarn yn Kollum.「彼は明日，コルムでフィエルリエペンをする（語彙的に固定した語）」(Hoekstra 1998：59)

Pyt siet wer de hiele jûn te *dompraten*.「ピトはまた一晩中，（すわって）ばか話をしていた」(ib. 58 変更)

⇔*Pyt *domprate* wer ris de hiele jûn.「ピトはまた一晩中，ばか話をしていた（語彙的に固定していない語）」(ib. 58 変更)

☞ オランダ語の mooipraten「お世辞を言う（不定形のみ）」は抱合動詞だが，hardlopen「疾駆する（不定形・定形）」は分離動詞である。

(3) その他

名詞抱合や形容詞抱合とは本質的に異なるものの，一見，類似している現

象がある。アクセントは前半部分にある。

(a) 品詞転換 (de konverzje)

合成名詞を動詞に転換した名詞派生の動詞([[NN]$_N$]$_V$)である。たとえば，sniebalje は 'snie「雪」+balje「ボール遊びをする」'ではなく，sniebal の動詞化である。

sniebalje「雪合戦をする，雪玉を投げる」(← sniebal「雪玉」)

skimerjûnje「夕涼みをする，夕暮れ時にすわって歓談する」(← skimerjûn「夕暮れ」)

toskedokterje「歯医者に通う」(← toskedokter「歯医者」)

☞ オランダ語には sneeuwballen「雪合戦をする，雪玉を投げる」(← sneeuwbal「雪玉」)，ドイツ語には schneeballen「同左」(← Schneeball「同左」)などの例がある。

次の語も抱合動詞ではなく，合成名詞の品詞転換である。

hantwurkje「手芸をする」(← hantwurk「手芸品」)

waarljochtsje「稲妻が光る」(← waarljocht「稲妻」)

(2)の類別的名詞抱合のなかにも，これに類するとも解釈できる語がある。

trieneagje「目に涙をためる」(trienje「涙が出る」+each「目」または trieneach「涙をためた目」)

☞オランダ語には handwerken「同上」(handwerk「同上」)，weerlichten「同上」(weerlicht「同上」)，traanogen「同上」，(traan「同上」+oog「同上」または traanoog「同上」)という語がある。ドイツ語には対応する動詞がない。

(b) [動詞+動詞]：V+V →[VV]$_V$

少数の語に限られる。2つの動詞の並列に由来するが，今日ではもはやそのようには意識されていない (Sipma 1949：60，Hoekstra 1998：32)。

fimeltiizje「くだらないことで混乱する」(← fimelje「たわごとを言う」+tiizje「混乱する」)

achtenearje「敬う，尊重する」(← achtsje/achte「同左」en earje「同左」)

☞ jin hâlde en drage「ふるまう，... という状況である」などの慣用句は分か

ち書きをし，hâlde と drage はともに語形変化する。

(c) 分離動詞 (it skiedber tiidwurd)

名詞部分と動詞部分が分離し，名詞抱合とは明確に異なる ($[NV]_V \rightarrow [V \ldots N]_V$)。

dielnimme「参加する」(hy nimt...diel「彼は参加する」)

stânhâlde「もちこたえる」(hy hâldt ... stân「彼は負けない」)

pleatsfine「開催される」(dat fynt ... pleats「それは行なわれる」)

☞ オランダ語では deelnemen「参加する」(hij neemt ... deel「彼は参加する」)，ドイツ語では teilnehmen「同左」(er nimmt ... teil「同左」) などの例がある。

参考文献

(前回までに掲載したものを除く)

Beukema, F./Coopmans, P. (eds.). *Linguistics in the Netherlands 1987*. Dordrecht. Foris.

Brockhaus-Wahrig. 1980-1984. *Deutsches Wörterbuch in sechs Bänden*. Wiesbaden/Stuttgart. Brockhaus/Deutsche Verlags-Anstalt.

De Haas, Wim/Mieke Trommelen. 1993. *Morfologisch handboek van het Nederlands*. 's-Gravenhage. SDU Uitgeverij.

Dijk, Siebren. 1997. *Noun incorporation in Frisian*. Ljouwert, Fryske Akademy.

Dyk, Siebren. 1992a. "Aspekt en nomenynkorporaasje". Yn: *Philologia Frisica anno 1990*. Ljouwert. Fryske Akademy. 49-61.

Dyk, Siebren. 1992b. "Warum gibt es im westerlauwersschen und Föhrer Friesisch eine Nomeninkorporation?". Yn: Faltings/Walker/Wilts. (Hrsg.). 1992. 143-169.

Duden 1999[3]. *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in zehn Bänden*. Mannheim/Wien/Zürich. Bibliographisches Institut.

Faltings, Volkert/Walker, Alastair A. G. H./Wilts, Ommo. (Hrsg.). 1992. *Friesische Studien* I. Odense. Odense University Press. NOWELE Supplement vol. 8.

影山太郎. 1993.『文法と語形成』. ひつじ書房.

影山太郎/由本陽子. 1997.『語形成と概念構造』. 研究社.

Klappenbach, R./W. Steinitz. 1964-1977. *Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. 6 Bände*. Berlin. Akademie-Verlag.

Schuurman, I 1987. "Incorporation in the Groningen dialect". In: Beukema/Coop-

mans (eds.). 1987. 185-194.
Sipma, Pieter. 1949. *Ta it Frysk* II. *Wurdlear*. Ljouwert. R. van der Velde.
Van Dale. 1992[12]. *Groot woordenboek der Nederlandse taal*. 3 dln. Utrecht/Antwerpen. Van Dale Lexicografie.
Veenstra, Durk H. 1988. "Oer de grammatika fan *be*-ferba". Yn: Dyk/De Haan (útj.). 1988. 136-174.
Weggelaar 1986. "Noun incorporation in Dutch". *International Journal of American Linguistics* 52. 301-305.

＊本稿は筆者の以下の論文に続く西フリジア語の文法構造の記述である。

「西フリジア語の音韻と正書法 (1)」(北海道大学文学部紀要 44－1．第 85 号．1995.37－81)

「西フリジア語の音韻と正書法 (2)」(北海道大学文学部紀要 44－2．第 86 号．1995.43－111)

「西フリジア語の文法構造―冠詞，名詞，形容詞―」(北海道大学文学部紀要 45－1．第 88 号．1996.21－81)

「西フリジア語の文法構造―代名詞―」(北海道大学文学部紀要 45－2．第 89 号．1996.79－176)

「西フリジア語の文法構造－数詞，副詞，der－」(北海道大学文学部紀要 45－3．第 90 号．1997.171－246)

「西フリジア語の文法構造―前置詞と後置詞 (1)―」(北海道大学文学部紀要 46－1．第 91 号．1997.23－62)

「西フリジア語の文法構造―前置詞と後置詞 (2)―」(北海道大学文学部紀要 46－2．第 92 号．1998.41－64)

「西フリジア語の文法構造―接続詞―」(北海道大学文学部紀要 46－3．第 93 号．1998.65－121)

「西フリジア語の文法構造―動詞 (1)―」(北海道大学文学部紀要 47－2．第 95 号．1998.21－97)

「西フリジア語の文法構造―動詞 (2)―」(北海道大学文学部紀要 47－3．第 96 号．1998.53－72)

「西フリジア語の文法構造―動詞 (3)―」(北海道大学文学部紀要 47－4．第 97 号．1999.89－124)

「西フリジア語の文法構造－動詞 (4)－」(北海道大学文学部紀要 48－1．第 98 号．1999.21－55)

記述上の問題点については筆者の次の論文を参照。

「西フリジア語文法記述の問題点」(北海道大学文学部紀要 44－3．第 87 号．1996.41－107)

西フリジア語の文法構造－動詞 (5)－

＊本稿は平成 12 年度文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。
研究課題：「ドイツ語・オランダ語・フリジア語の対照文法記述―西ゲルマン語類型論に向けて」. 基盤研究(C)(2). 課題番号10610491（研究代表者　北海道大学文学部助教授　清水　誠）